# 第3回

（若手技術者向け）フィールド参加型

# 「地域課題発見・解決力」養成研修会

# 報告書

平成27年11月14日-15日

（一社）建設コンサルタンツ協会九州支部内

## 九州 郷づくり共助ネットワーク研究会

# 目　　次

ごあいさつ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　１

１.全体プログラム・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　２
　（１）スケジュール　２
　（２）参加者　６
　（３）グループ分け　７

２.各チームの成果・総評等　・・・・・・・・・・・・・・・・　９
　２－1.A チームの成果　１０
　２－2.B チームの成果　１３
　２－3.C チームの成果　１６
　２－4.総括・総評　１９
　２－5.研修生からの一言（研修終了後の感想等）　２０
　２－6.集合写真　２２

参考資料①：田代原高原の概要　・・・・・・・・・・・・・　２３
参考資料②：田代原高原に残る草地・環境を維持する方策(案)　２７
参考資料③：PCM 手法の概要　・・・・・・・・・・・・・・　２８
関連資料①：プレス資料　・・・・・・・・・・・・・・・・３３
関連資料②：事務局資料　・・・・・・・・・・・・・・・・３５

## ごあいさつ

今、私達建設コンサルタントは、変化していく社会ニーズに対して、それぞれの専門技術を核としながら、自律した建設コンサルタントとして積極的に対応していくことが強く求められています。

例えば、疲弊する地域の問題について、私達自身が地域に入ってその実態を体感し、その解決策を探りだしていくと言った、「地域課題発見・解決力」とも呼ぶべき総合的な技術力を身に付けることも重要になっています。

建設コンサルタンツ協会九州支部は、夢アイデア部会活動の一環として様々な地域の地域づくりを支援してきました。大分県豊後大野市犬飼町長谷地区はその一つですが、この地区をフィールドとして一昨年、第１回目の「地域課題発見・解決力」養成のための若手技術者向け研修会を、現地の自然を巡り、現地の声を聞き、現地の人々とひざを交えながら実施し、平成２６年１１月には、長崎県雲仙市田代原地区で第２回「地域課題発見・解決力」養成研修会を開催しました。

田代原地区は、雲仙天草国立公園の第２種特別地域に指定され、ミヤマキリシマ等の貴重な生物が生育していますが、近年、様々な環境の変化により、その生育が脅かされています。そのため地域の魅力も失われつつあり、地元では、地域活力の再生が望まれています。その中で、かつての産業（牧畜業等）の掘り起こしや、観光地としての魅力を取り戻すこと、あわせて、環境教育の場としての活用等、多くのテーマが取り上げられました。

今回の研修会は、前回同様に「NPO 奥雲仙の自然を守る会」及び「九州 郷づくり共助ネットワーク研究会（略称：共助研）」が雲仙市田代原地区にて実施しました。ご承知のように、前出守る会は、奥雲仙で地域の環境保全活動を進めておられ、後者は中山間地域を主体に地域支援活動を進めている私たちです。両者の持ち味を活かし、建コン若手技術者と共に、ＰＣＭ手法を活用して奥雲仙地区の問題分析・プロジェクト検討の作業を行ったものです。特に今回は、長崎大学環境科学部環境科学科の学生さんのフィールド研修との合同研修として実施しました。

また、現地の環境省雲仙自然保護官事務所からもご参加いただき、雲仙天草国立公園の価値や規制の意味合い、島原半島の歴史までの幅広いご助言をいただきました。

日頃のコンサルタント業務とは一味も二味も異なる観点と手法を用いて、地域の中で足と手と口を使いながら作業する機会を持てたことは、若手技術者の方々にとって新たな技術力として今後に役立つことは間違いなく、この手法が他方でも試行されるよう願っています。

（一社）建設コンサルタンツ協会九州支部内

**九州 郷づくり共助ネットワーク研究会**

会長　針貝武紀

同　会員一同

# 1. 全体プログラム

## (1)スケジュール

**事前説明会**　　平成２７年１０月２８日（水）　16:30-18:00

今回の研修を行うにあたって、事前に、長崎大学環境科学科の学生さんに、奥雲仙田代原の概要と問題点を知ってもらうべく、事前の説明会を開催しました。

杉村教授、関准教授、共助研からは矢ヶ部、NPO 奥雲仙の自然を守る会からは、中田代表と木田さん、それぞれが、田代原高原の現状と問題点について話をしました。

**11 月 14 日午前中**

当日は、雨にもかかわらず 7:30 の JCCA 事務局前参加者組は予定時間に出発。途中、基山 SA で、大分チームと合流、さらに神代駅で、長崎大学の杉村教授、関准教授、学生さんらと合流しました。田代原の会場には、岸田自然保護官、北九州、久留米から直接現地に向かった波木事務局長、松尾リーダーも到着し、全員集合となりました。

進行：矢ヶ部（共助研）

1.開会挨拶　NPO 奥雲仙の自然を守る会　中田代表　　10:50-10:55

2.参加者紹介　　10:55-11:10

- ✧ NPO 奥雲仙の自然を守る会（中田代表より）
- ✧ 環境省雲仙自然保護官事務所（岸田自然保護官より）
- ✧ 九州郷づくり共助ネットワーク研究会：共助研（松尾リーダーより）
- ✧ 長崎大学環境科学部環境科学科（杉村教授より）

3.本日の予定紹介・チーム分け紹介（矢ヶ部より）

4.講座「雲仙天草国立公園、島原半島、そして、田代原高原について」　　11:10-12:30

環境省雲仙自然保護官事務所（岸田自然保護官）

雲仙・島原の景観的特徴、特に、四方を海に囲まれ、遠くは熊本阿蘇からも遠望できる雲仙岳の姿を紹介。

国立公園の指定目的である特徴ある自然環境・景観の保全と利用の役割について、そのバランスを取ることの重要性や、日本とアメリカの国立公園の違いについての説明がなされた。また、近年になり、急激に牧草地に生育するミヤマキリシマの生育域が失われてきたことを紹介。

また、島原半島の歴史や、雲仙岳の宗教的な意味など広範囲な視点から解説された。

## 昼食・休憩・活動紹介　12:30-13:20

九州郷づくり共助ネットワーク研究会の活動紹介（波木事務局長）

地元の食材をふんだんに使ったお弁当がふるまわれ、共助研メンバー、地元住民、長崎大学の学生さんたちが、和気あいあいとした雰囲気の中での食事と休憩時間。

休憩時間を使って、波木事務局長より、共助研の紹介がなされました。

## 11 月 14 日（土）午後

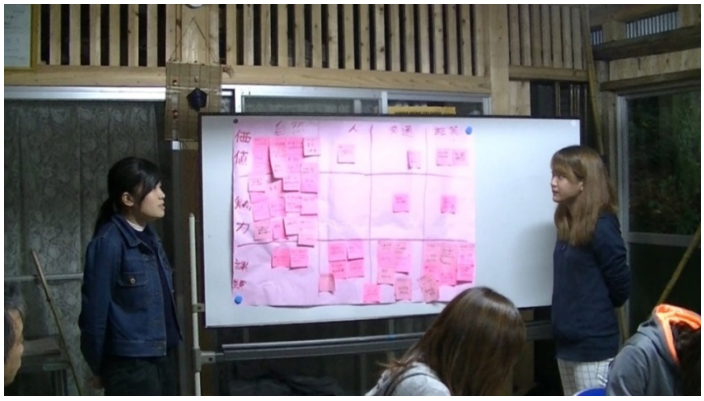
5.グループ討議　13:30-17:30

予定では、田代原高原において、ミヤマキリシマ保全活動として草刈り等の作業を行うこととなっていましたが、あいにくの雨で、作業は中止になりましたので、討論会から始めることとなりました。

- ✧ 田代原高原の現状と課題の報告（矢ヶ部（共助研））
- ✧ PCM 法の説明（木寺（共助研））
- ✧ グループ討議：討議テーマ：田代原高原の価値・魅力、問題点、課題
- ✧ 初日の状況報告（各チーム発表者より）

最初のグループ討議のテーマは、３つのチーム共通テーマである「田代原高原の価値・魅力、問題点・課題」について、チーム別に討議しました。討議は、今回参加された若手技術者をファシリテータとして進められ、討議の結果は、チームの代表として、長崎大学の学生さんが報告しました。

討論の成果については、２章にチーム別に掲載しています。



移動（NPO 研修室　⇒　遊学の里くにみ）　17:30-18:00

6.夕食懇親会【食事と経験談報告】　18:30-19:30

夕食後に、会場において、経験談話会を開きました。昨年、田代原をテーマに卒論を書かれた靏田さん、NPO から柴田さん、共助研からは木寺さんが、それぞれの体験談を語られました。また、特別参加として中国からこられた藩輝教授からも、日本の印象など話していただきました。最後に、２年生、３年生の学生さんからおひとりずつ、今回参加した感想等の話をしてもらいました。

【夜なべ談義】

夜もだいぶ寝静まった頃、共助研メンバー等が飲み会をやっていた部屋に、学生さん６名が、先輩たちと話がしたいということで、やってきました。

眠そうにしていた共助研メンバーも、学生さんたちの熱意に、改めて目がぱちりと覚め、学生さんからのいろいろな質問、そして、共助研メンバーから学生さんへの質問等で、楽しい会話が交わされました。

## 11月15日（日）午前中

二日目は、昨日と打って変わり、青空が広がる一日がスタートしました。山々の緑も、昨日の雨の影響で、一層、艶やかです。

７．朝食と自由時間　7:00-8:00

８．移動と現地確認（遊学の里くにみ　⇒　NPO 研修室）　8:30-9:40

遊学の里くにみから NPO 研修室へ向かう途中、「遊々の森」「トレイルセンター」「キャンプ場」に立ち寄り、田代原の現地を確認してもらいました。昨日は、現場を見ることなしに、田代原の課題や問題点を討議しましたが、現場の状況を目にすると、その考えも一部、見直しが必要になる学生さんもでました。

9.グループ討議　9:40-11:40

昨日に続き、グループ討議を行いました。昨日の「田代原の魅力・価値、問題点・課題」の成果を受け、今回は、各チームに与えられたテーマを議論しました。

各チームのテーマは P.8 のとおりです。

**昼食・休憩　12:10-13:00**

二日目の昼食は、地元の人手作りの華やかなちらし寿司です。特に、中国から来られた藩輝先生は、はじめてなようで、そのきれいな盛り付けに、そして、その素朴な味に感動されていました。また、日本では、お祝いの席に出される食べ物ですとの紹介を受け、納得されていました。

昨日とは打って変わって、晴天に。学生さんたちも、田代原の集落や近くの裏山を散歩に。

**11 月 15 日（日）午後　13:00-15:00**

10.報告会・総括　成果報告（各チーム発表者より）発表 15 分、質疑 5 分　13:00-14:00

各チームの代表者から、今回の成果の報告を行いました。

あわせて、ファシリテータ役の若手技術者の方、そして、各チームのとりまとめ責任者の方からのとりまとめにあたっての苦労話等の話をいただきました。成果の内容については、第２章にチーム別に掲載しています。

各チームの発表を終え、総括として、松尾リーダー、岸田自然保護官、関准教授、杉村教授から、それぞれお話をいただきました。

総括の概要については、第２章 2-4 に掲載しています。

最後に、NPO 奥雲仙の中田代表より、閉会の挨拶をいただき、研修会を無事終了しました。

その後、それぞれ一路岐路へ。無事に、それぞれの到着地へつきました。

## (2)参加者(敬称略)

第３回研修会には、JCCA から２名の研修生を含め 12 名が、長崎大学からは、杉浦教授、関准教授、それに中国から観光施策の研究で日本に来られている藩輝教授、学生さん 17 名の計 20 名の方が参加されました。また、昨年同様に、環境省雲仙自然保護官事務所から、岸田自然保護官、瀬戸口さんが参加されました。

地元、田代原では、NPO 奥雲仙の自然を守る会の中田代表をはじめ多くの方々が、研修に、また、昼食等の準備に参加されました。

| 所　属 | 氏　名 | 参加人数 | 14 日 | | | 15 日 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | 昼食 | 夕食 | 宿泊 | 昼食 |
| 長崎大学　教職員　等 | 杉村　乾　教授<br>関　陽子准教授<br>藩輝　教授 | ３名<br>（２名）<br>（１名） | 3 | 3 | 男２<br>女１ | 3 |
| 長崎大学　学生<br>（２年生、３年生） | 磯田、井上（14 日のみ）佐々木、山下、川添、雀ヶ野、田川、森田、緒方、佐々野、志田、大原、椛、中迫、橋口、原口、鎌田（OB 参加） | 17 名<br>（8名）<br>（9名） | 17 | 15 | 男6<br>女9 | 15 |
| NPO<br>奥雲仙の自然を守る会 | 中田代表<br>柴田<br>木田<br>入口<br>他 | — | — | 5 | — | — |
| 環境省<br>雲仙自然保護官事務所 | 岸田<br>瀬戸口（14 日のみ） | 2名<br>（1 名） | 2 | 2 | 男1 | 1 |
| JCCA　共助研 | 波木　事務局長<br>松尾　P リーダー<br>濱田　P 副リーダー<br>山下　P 副リーダー<br>矢ヶ部 P 副リーダー<br>木寺（15日朝まで）<br>森脇<br>前田<br>波多野<br>鶴田（15日朝まで） | 10 名<br>（9名）<br>（1 名） | 10 | 10 | 男9<br>女1 | 8 |
| JCCA　研修参加者 | 山口（扇精光ｺﾝｻﾙﾀﾝﾂ）<br>田中（国際航業） | 2名 | 2 | 2 | 男2 | 2 |
| 計 | | 34 名<br>（12名） | 34 | 37 | 男 20<br>女 11 | 29 |

注）赤字は女性参加者

### (3)グループ分け

研修の討論にあたっては、３つのチームを構成し、それぞれのテーマについて討議しました。
（1 チーム　10 名程度：構成　共助研：３名、研修生：１名、地元：２名、長崎大：６名）

| Aチーム |
|---|
| **長崎大学学生さん** |
| 磯田　、佐々木　、山下　、緒方　、佐々野　、志田 |
| **アドバイザー** |
| 岸田（環境省）、木田（NPO）、NPO、地元の方 |
| **ファシリテーター（共助研）** |
| 鶴田（濱田） |
| **共助研（＊進行責任者）** |
| 松尾（＊）、濱田、鶴田 |

| Bチーム |
|---|
| **長崎大学学生さん** |
| 井上　、川添　、雀ヶ野　、大原　、椛 |
| **アドバイザー** |
| 中田（NPO）、柴田（NPO）、NPO、地元の方 |
| **ファシリテーター（JCCA 研修生）** |
| 山口 |
| **共助研（＊進行責任者）** |
| 森脇（＊）、山下、木寺 |

| Cチーム |
|---|
| **長崎大学学生さん** |
| 田川　、森田　、中迫　、橋口　、原口　、鎌田 |
| **アドバイザー** |
| 瀬戸口（環境省）、波木（共助研） |
| **ファシリテーター（JCCA 研修生）** |
| 田中 |
| **共助研（＊進行責任者）** |
| 前田（＊）、波多野、矢ヶ部 |

また、各チームには、共通テーマと個別テーマを提示し、議論してもらいました。

なお、個別テーマについては、初日の議論を通し、PCM 法による「中心問題の決定」等のプロセスを踏まえ、テーマの妥当性についても討議たうえで選定しました。

| チーム | テーマ | ファシリテーター（共助研スタッフ） | アドバイザー |
|---|---|---|---|
| A<br>B<br>C<br>共通 | ■雲仙、田代原高原の価値とはなにか？<br>■雲仙、田代原高原の魅力とはなにか？<br>■雲仙、田代原高原の問題点、課題はなにか？ | | |
| A | **【イベント企画　チーム】**<br>雲仙、田代原高原を知ってもらうためのイベントとしてどのようなことをすればいいか。<br>また、その企画について考える。<br><br>問題分析：なぜ、知られていないか？<br>目的分析：イベントのテーマはなにか？<br>プロジェクト選択：どのようなイベントか？ | 進行責任者：松尾<br>補佐：濱田<br>ﾌｧｼﾘﾃｰﾀｰ：<br>鶴田（濱田） | 環境省岸田氏<br>木田氏<br>NPO メンバー |
| B | **【受け皿企画　チーム】**<br>雲仙、田代原高原を訪れる人を増やすため、地域はどのような受け皿を用意すればいいか。<br>また、その受け皿の具体的イメージについて考える。<br><br>問題分析：なぜ、訪れないのか？<br>目的分析：訪れる地域の魅力とは何か？<br>プロジェクト選択：どのような受け皿が必要か？ | 進行責任者：森脇<br>補佐：山下、木寺<br>ﾌｧｼﾘﾃｰﾀｰ：山口 | NPO 中田代表<br>柴田氏 |
| C | **【広報検討　チーム】**<br>雲仙、田代原高原の価値を広く知ってもらうための広報のあり方について考える。また、広報の具体的なイメージについて考える。<br><br>問題分析：なぜ、知られていないか？<br>目的分析：広報のテーマはなにか？<br>プロジェクト選択：どのような内容の広報か？ | 進行責任者：前田<br>補佐：波多野<br>ﾌｧｼﾘﾃｰﾀｰ：田中 | 環境省瀬戸口氏<br>波木事務局長<br>NPO メンバー |

## 2. 各チームの成果・総評等

各チームに分かれ、次のスケジュールで議論を進めました。

14 日（初日）13:30-17:00　共通テーマ「田代原高原の価値と魅力、その問題点と課題」
各チームの「中心問題の決定」を踏まえたテーマの妥当性について
17:00-17:30 各チームの成果報告

15 日（二日目）9:40-12:10　各グループのテーマに関する討議、プロジェクトの提案
13:00-14:00　各グループの成果報告及び総括

各チームの検討成果の概要は、次の通りです。なお、個別の詳細については、次ページ以降に示します。

| テーマ | 概　　要 |
|---|---|
| 共通テーマ | 田代原高原の価値・魅力について<br>● 「国立公園」としての四季折々の自然の魅力、「ミヤマキリシマ」「ヤマボウシ」等の珍しい植物の生育など特徴ある環境がある<br>● 国立公園内の牧草地は、唯一、国立公園指定当時（80 年前）の景観の面影が見られる場所でもある<br>● 千々石断層などの地形上の特徴や、殿様道路の存在等の歴史的な環境もある<br>● パワースポット、静寂感、薬草の生育など、癒しや健康の場でもある<br>● 地元の食べ物や、地元の人の温かさ |
| | 田代原高原の問題点・課題<br>● 豊かな自然ではあるが、魅力の強みが全体的に弱く、見どころが少ない<br>● 道路状況、公共機関の状況含め交通が不便<br>● 地域の連帯感のなさ<br>● ともかく、知名度が低く、ほとんど知られていない<br>● 「ミヤマキリシマ」保全活動においても人手不足、PR 不足 |
| 個別テーマ | A チーム：雲仙、田代原高原を知ってもらうためのイベントとは？<br>プロジェクト名：Come Back!! Miyamakirishima<br>● ミヤマキリシマ復活のための草刈り作業と牛馬の頭数の増加<br>● 学生自らが実践するプロジェクトとそのための実施体制づくり |
| | B チーム：人を増やすため、地域はどのような受け皿を？<br>プロジェクト名：自然の学びの奥雲仙田代原<br>● 環境教育のためのプロジェクトと草原牧場とミヤマキリシマの復活<br>● 体験教室、保全活動・研究活動への各種体制づくり |
| | C チーム：広く知ってもらうための広報とは？<br>プロジェクト名：何もないのが悪いのでなく、何もないのがいい<br>● 外からのアプローチ：バスツアー、SNS の利用、食べ物による PR<br>● 内からのアプローチ：学童保育への活用、お祭りの企画 |

## 2－1. A チームの成果

| 田代原高原の価値･魅力について | |
|---|---|
| 四季・自然 | 四季折々の魅力がある、四季を感じられる、自然を近くで感じられる<br>紅葉、草原　等<br>「風の通り道（風の谷）」の田代原 |
| 歴　史 | 歴史、これまでの歩み、成り立ち<br>地の変動により作り出された土地 |
| 国立公園 | 「国立公園」という肩書<br>国からも認められ保護されている<br>国立公園指定当時（80 年前）の景観の面影が見られる場所 |
| オリジナリティ | 標高 600mの断層上にある草原<br>殿様道路が残っている<br>山の特別名勝地（2 箇所） |
| 田代原高原 | 「ミヤマキリシマ」という希少な植物の生育地があること<br>ここにしか咲かない花、薬草が多い場所<br>山頂に咲く「ヤマボウシ」　６月<br>そこに住む方々の温かさ、奥雲仙を愛する気持ち、地元愛<br>火山の動きを感じられる場所、今までの火山活動が見える場所 |
| その他 | 人の手があまり加わっていない<br>おいしい食材がある<br>五感で味わえる自然<br>避暑地 |

| 田代原高原の問題点について | |
|---|---|
| 見どころ | 田代原の強みが全体的に弱い、見どころが少ない<br>明確な観光の目的が見当たらない（登山？）<br>どこにでもある山としか思えない |
| 設　備 | 建物が老朽化、整備されていない<br>観光の際、必要なものはそろっているのか（休憩所、宿泊所、お店等） |
| 知名度 | 知名度の低さ<br>仁田峠、雲仙温泉、普賢岳に比べて、知名度が低い |
| アクセス | 交通が不便、山の中でなかなか人が来ない<br>道が狭い、街灯が少ない |
| 意　識 | 住民の意識格差<br>地域住民（国見町など）の巻き込み方不足<br>田代原の魅力を継承していく人が少ない |
| 資金・人手不足 | 草原を維持するためには継続的な対策が必要<br>草原を維持できるだけの人手が足りない<br>大きくなったアカマツの伐採問題<br>ミヤマキリシマの被圧木除去の参加者集め（都市住民、地域住民）<br>保護対象が大きいのに対する取り組んでいる方々が少ない<br>大きな取組がなされていない、資金不足、人手不足 |
| その他 | JA による放牧の維持・継続<br>馬の放牧の歴史紹介 |

**A チームテーマ**

雲仙、田代原高原を知ってもらうためのイベントとしてどのようなことをすればいいか。また、その企画について考える。

| | |
|---|---|
| 中心問題 | ストロングポイントがない（大きな見どころとなる場所がない）<br>イベントを運営する人手不足、資金不足 |
| 原　因 | 中心産業がない（牧畜、農業）<br>地元住民の関心が薄い<br>若者の流出、農業をする人がいない<br>自然への興味が薄れた、自然学習が減った<br>交通の便が悪い、一方で、他への交通アクセスが良くなった<br>現代技術の進化で娯楽が増えた<br>大学等のボランティアが少ない<br>調査・研究等の専門家の関わり（計画性）<br>栄養の多い土があるが特産品が少ない、生かし切れていない<br>人々が来たくなるような理由がない |
| 結　果 | お店、ひと気がなく、活気がない<br>キャンプ場は、もうひとひねり<br>尖った木、滑りやすい板、目が届かなくなった場所の安全管理<br>観光客を受け入れる設備が整っていない、宿泊施設が近くにない<br>知名度が低い、他の地域のイベントに負けてしまう<br>雲仙温泉の方が魅力的 |
| 人手不足解消のために | 研修イベントの提案<br>かつて名産だった馬のプチ放牧、乗馬体験のコーナーをつくる<br>勉強会の開催（おいしい郷土料理等のなんらかの利点をつけて）<br>ミヤマキリシマの危機を伝える、発信母体を増やす<br>牛のブランド化による放牧の担い手の採算性確保（ミヤマキリシマ牛　等）<br>今の現状を知ってもらう機会をつくる<br>「楽しそう」と思われる要素を盛り込む<br>ボランティアを募る、大学のエコサークルへの呼びかけ<br>街のイベントや祭りで宣伝を行う |

| プロジェクト名 | Come Back!! miyamakirishima |
|---|---|
| 目的・概要 | ミヤマキリシマ復活のための草刈り作業<br>牛馬の保護、頭数の増加<br>ボランティア団体、学生、企業への呼びかけ |
| 実現のための実施体制 | エコ連合サークルと提携して行う<br>環境保護団体・地元企業との協力体制（資金面も含めて）<br>PR 活動を行う |
| 資金計画 | 募金箱の設置、呼びかけ<br>ボランティア負担<br>長崎・熊本等の企業に呼びかけ、資金協力を要請する |
| 前提条件 | 継続的な実施<br>６月（ヤマボウシ等）、11 月（紅葉）景色がきれいな時期に開催 |
| 望まれる効果 | ミヤマキリシマの復活<br>牛馬の保護、頭数の増加<br>知名度 UP、見どころが増える |

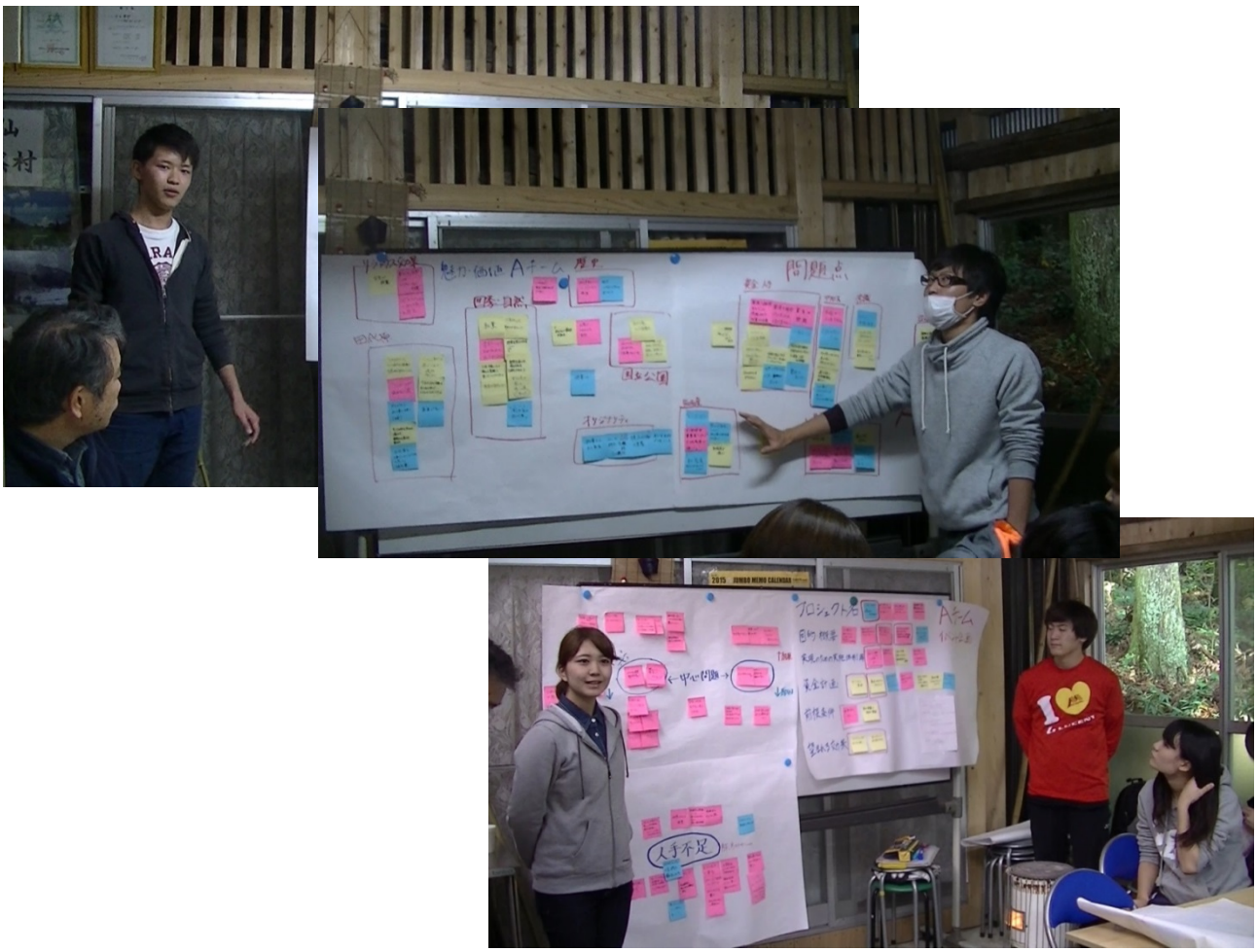
【取りまとめ担当者からの一言：松尾】

初日、あいにくの雨ということもあり、現場の状況を肌で感じないまま議論したが、二日目に、現場を見て、この環境を自分たちの手で守っていきたいという方向にメンバーの気持ちが大きく変わった。この気持ちの変化がおきるという体験が貴重だったと思う。

【ファシリテーターからの一言：濱田】

初日は、資金的な問題等を議論していたが、二日目になり、自分たちの実行できるプランをつくろうということになり、そのような動きになったことは素晴らしいと思う。

A チーム:ワークショップ風景(議論、発表)



## 2－2. B チームの成果

| 田代原高原の価値･魅力について | |
|---|---|
| 風　景 | 視界が開けている、景観、景観がきれい<br>高原の広さ、草原、森の中にある草原という特殊な環境<br>人と自然のかかわり、里山の存在、放牧<br>草原に咲くミヤマキリシマ、断層 |
| 四　季 | 四季の自然の色彩、四季で変化する豊かな自然<br>全国随一ヤマボウシの白い花(6 月)、ヒカゲツツジ(5 月下旬)、紅葉(遊々の森)、山アジサイ(6 月)、ここしかいない毛氈苔、霧、朝もや |
| 教育の場 | 遊歩道があって運動ができる<br>森林教育の場、遊々の森<br>国立公園内の保全活動<br>雲仙温泉の穴場<br>人の生活に支えられ残されている景観（草原） |
| 歴　史 | 殿様ロードなどの歴史、修験道の山、五万長者、伝説、田代原遺跡、<br>山番人、今は、管理人<br>千々石断層が直に見られる |
| 六　感 | 霧が濃い、空気の新鮮さ、涼しい気温、夏の避暑地、<br>セラピーの機能、身体活動ができる<br>パワースポット<br>静寂、暗い(星が見える)<br>六感を活用した癒しの場として活用できる、自然との距離が短かな場所<br>牛舎の匂い |
| 物　産 | 松酒、薬膳料理、草木染 |

| 田代原高原の問題点･課題について | |
|---|---|
| 施　設 | 野営場、トレイルセンターなどの公共施設の利用度が低い<br>突然の来訪に対応しにくい、アクティビリティが少ない<br>駐車場が少ない<br>(周辺に)施設が多すぎる |
| 自　然 | 牛の減少などによる雑木林の草原への進入が進んでいる(ミヤマキリシマ減少)<br>平地がなくなろうとしている<br>外来種による草原の変化 |
| 情　報 | もっとすごいところがある、行こうと思うきっかけがない<br>アピールが不足、田代原のことが知られていない、知名度・認知度が低い<br>地元の人も知らない、情報発信不足、人が訪れない<br>島原＝温泉のイメージ<br>景観が活かされていない、魅力の整理、ヤマボウシも一部の人しか知らない |
| 交　通 | 交通の便が悪い、行きにくい、交通の手段が少ない、路肩の雑草 |
| 人 | 人口の減少、若い人材の不足、保全活動をする上でも放牧をする上でも人材不足<br>保全活動に参加する人が少ない |
| ネットワーク | 雲仙全体とのふれあいがない<br>観光ネットワークがない、雲仙温泉街のお客はなかなか田代原には来ない |
| ルール | 国立公園内では、なにもできない、してはいけないと思われている |
| 行政との連携 | 県・市とも重要視していない |

**B チームテーマ**

雲仙、田代原高原を訪れる人を増やすため、地域はどのような受け皿を用意すればいいか。また、その受け皿の具体的イメージについて考える。

| プロジェクト名 | | 自然の学びの奥雲仙田代原 |
|---|---|---|
| 概　要 | | 環境教育のための３つのプロジェクトを提案する |
| 目　的 | | 草原牧場とミヤマキリシマの復活 |
| メニュー・プログラム | ①体験教室 | 遊歩道などを実際に歩く、散策、キャンプ<br>珍しい植物さがし、動植物とのふれあい<br>長期休暇に利用する<br>「田代原」と「遊々の森」との区別<br>宿泊学習見たいので自然とふれあう、自然学校(教室)の開校<br>森の恵みをいただく(食)、山菜・木の実採取<br>地元の人々とのふれあい<br>四季を感じるものを撮る写真教室<br>木の間伐 |
| | ②保　全 | 牧場とミヤマキリシマのつながり<br>保全活動（ミヤマキリシマ、草原）<br>ミヤマキリシマの説明と保全活動を体験してもらう<br>小学生の自然体験<br>草を刈るなどの保全体験学習<br>保全活動で伐ったもので、何かをつくる<br>ミヤマキリシマの調査、植林 |
| | ③研　究 | 大学生の研究の場、植生調査・経年変化・生態系調査<br>小中学生のための植物研究<br>バードウオッチング<br>樹林・野草・薬草の生態系調査、どんな植物・動物・昆虫がいるのか<br>植物図鑑を作る<br>断層調査<br>森林から海へ<br>医者にかからないための４つの効果：野草の効果<br>● ツユクサ：解毒、下痢止め<br>● マタタビ：疲労回復、滋養強壮<br>● オトギリソウ：温血<br>● ドクダミ：動脈硬化 |
| 受け皿 | ①体験教室 | 立ち入り禁止区域の整備<br>長期的に滞在できる最低限の設備整備<br>貴重種の看板<br>ルートマップ、地図<br>急に変化する天気への対応、雨の時にできること<br>体験の区分とコースづくり、体験するための道具<br>体験指導者不足、教える人 |
| | ②保　全 | 安心安全とトイレ・保護施設、歴史案内板<br>殿様道路を「花いっぱいロード」にする<br>人材、資金 |
| | ③研　究 | 研究の発表の場<br>データの集約<br>体験教室開設に当たり指導できる人材の確保 |

【取りまとめ担当者からの一言：森脇】

議論の途中で、地元の方の気持ちと、自分たちの気持ちのずれがあることがわかり、軌道修正を行った。特に、より多くの人を呼び込もうということではなく、この場所の価値を求める人に場を提供するという方向性で、今回は、それを環境教育という視点で、地域の受け皿について議論した。

【ファシリテーターからの一言：山口】

中田代表の意見が新鮮で、これまでの都市へ憧れる価値観から、根本的に必要なものを求める価値観へ転換しつつあることをうけ、この場所を活かしていこうという気持ちは、今回、大変勉強になった。

B チーム：ワークショップ風景（議論、発表）

## 2－3. C チームの成果

| 田代原高原の価値･魅力について、課題について | | |
|---|---|---|
| 自　然 | 価　値 | 地質学としての大きな価値、千々石断層<br>島原半島のかつての風景：ミヤマキリシマ、山の景色（紅葉、霧）<br>素麺、じゃがいも |
| | 魅　力 | 三方海に囲まれ、そびえる山、どこの県からも眺望できる雲仙の雄大さ<br>温泉、湯せんぺいがおいしい<br>草原と山の一体となった風景、自然（山）、植物（紅葉）、静寂<br>放牧によって維持されてきたミヤマキリシマ |
| | 課　題 | 観光資源の PR（温泉、ミヤマキリシマ）<br>知名度の低さ（「雲仙」ではわかるが、「田代原」ではわからない） |
| 人 | 価　値 | 草原牧場田代原の再生<br>田代原の言い伝えの掘り起し<br>価値をわかりやすく表現（自然を受け継いでいること、挑戦していること）<br>商業登録の活用、若者は SNS |
| | 魅　力 | 地域還元、地域券による売り上げ向上の促進<br>南島原のこと（良さ）を知る<br>島原半島全体に利益が出るようにする（温泉地以外にも利益を）<br>学童教育でのアピール<br>地域が他地域にも興味を持ってもらう、田代原からのアピールを進める<br>市ごとにそれぞれの魅力を出し合い競わせる<br>地域全体で観光を盛り上げる<br>特産品販売で、人との交流を、他産品とのタイアップ |
| | 課　題 | 半島内での交流の少なさ、半島が一つになっていない<br>市ごとに対立しがち、協力体制が要、島原半島の連携の問題（17 市町村）<br>地域住民の無関心<br>まず、市が連携できるようにし、市民の無関心をなくす⇒市民に利益が出るとわかれば関心が出るかも |
| 交　通 | 価　値 | 将来、新幹線が諫早までくる<br>熊本からフェリーで来られる、フェリーに乗ることのメリット・魅力 |
| | 魅　力 | 市のタクシー（安い or 無料）、半島全体のバスツアー、馬車<br>鉄道に乗る機会、世界遺産ツアーのスポット |
| | 課　題 | 過疎による公共交通機関の便の減少、交通の便が悪い<br>島原鉄道の料金が高い |
| 施　策 | 価　値 | 普賢岳、登る＋田代原、温泉もある<br>周辺には温泉もあり高原は避暑地になるリゾート地 |
| | 魅　力 | ネット、口コミ、るるぶ、ラジオ配信、外からの広報は大学生<br>大学生や一般人からボランティアを募る（キャンプ、一日研修　等）<br>日本で初の国立公園<br>温泉と田代原高原の観光をセットで PR する |
| | 課　題 | 北目と南目の生活圏の違いで田代原高原を知らない<br>牧場が運営できなくて、人も牛も減った<br>知名度が低い、ジオパーク、国立公園であることがあまり知られていない<br>島原の住民も田代原高原を知らない<br>特産品（アイスクリームなど）がない<br>管理者の施策 |

**C チームテーマ**

雲仙、田代原高原の価値を広く知ってもらうための広報のあり方について考える。また、広報の具体的なイメージについて考える。

| プロジェクト名 | 何もないのが悪いのでなく、何も無いのが良い |
|---|---|
| 目的・概要 | テーマ：田代原の自然<br>問題：知名度の低さ、地元の無関心<br>他地域の人々に知ってもらい、観光客が来ることで地元の人に愛郷心も芽生える |
| 外からのアプローチ<br>不特定の人を対象とする | バスツアー<br>● バスで日帰りツアー（特産品お土産、商品券つき）<br>● 天草とのツアー連携で、イルカウオッチング<br>● 知名度が高く、つながりのある阿蘇山と協力する<br>SNS<br>● 旅行誌のページに、フェイスブックのリンクや QR コードを載せる<br>● 写真に位置情報をつける<br>● ツイッター等の SNS による風景の拡散<br>● HP は、月に 1 回など更新頻度を上げる<br>● 千々石断層、ミヤマキリシマ、県の花等のアピール<br>● 若者、家族、年配者【要補足】<br>食べ物<br>● 島鉄内での車内販売<br>● クレープ、じゃがちゃん、温せんぺい<br>● ゆずポン、ゆず羊羹等の特産品<br>● クレープのパッケージにミヤマキリシマや普賢岳をコピーする<br>● 長崎市内で、奥雲仙の食べ物、特産品の特別展をひらく |
| 内からのアプローチ | 学童教育<br>● 小学生の自然学習の場とする<br>● 子供たちは親が見る CM<br>● 高校の研修<br>お祭り<br>● 半島内での大規模なお祭り<br>● 子供たちのお祭り<br>● もみじ祭り（田代原の紅葉を知る機会）、星祭 |
| イメージ戦略 | ペガサス乗馬体験で、田代原へ来てもらう<br>牛だけでない、草原のイメージを。阿蘇のように |
| ボランティア | ボランティア募集　大学や一般公募、ピアサポート<br>募集を見るだけでも知る人は増える |

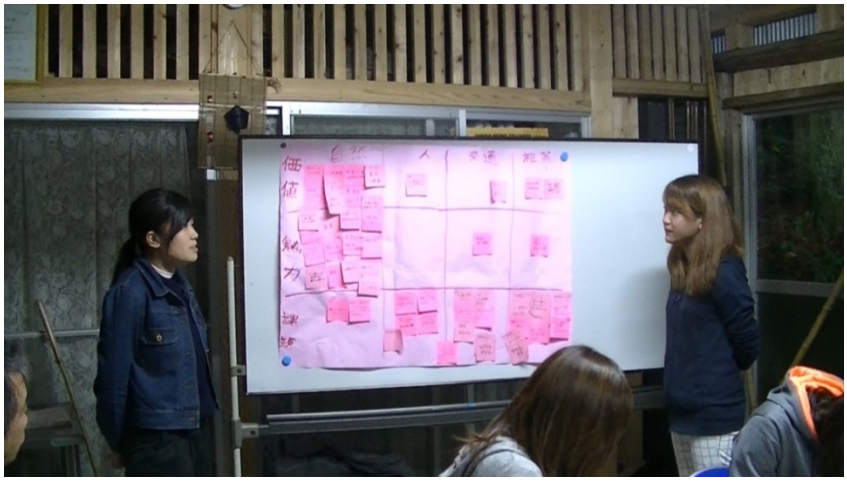
【取りまとめ担当者からの一言：前田】

魅力・価値と問題点・課題をマトリックスにして、埋めていく作業をすることで答えが出てくるのではと思って作業を進めてきた。環境教育、ボランティアの取り組みを包括的に議論できたのではないかと思う。また、新しい技術である SNS を使った広報について活発な提案がされたというのも、若い世代ならではの提案だと思う。

【ファシリテーターからの一言：田中】

二日目は、学生さんの自主的・積極的な姿勢で議論が進み、センスの良さ、一生懸命さも伝わった。提案内容も、資金的な問題が少ない SNS の利用等、実現可能な提案がなされたと思う。

Ｃチーム：ワークショップ風景（議論、発表）



## 2－4. 総括･総評

**■松尾リーダー**

- Ａチームはイベント企画として「Come Back!! Miyamakirishima」、Ｂチームは地域の受け皿として「自然の学びの奥雲仙田代原」、Ｃチームは広報として「何も無いのが悪いのではなく、何も無いのが良い」という各プロジェクトが提案された。
- 今回の各プロジェクトは、学生サークルの活用、SNS の利用等学生の視点に立った内容であり、昨年度に実施した建コンや地域のメンバーによるアウトプットとは異なるものの、実現可能性や即効性では、地に足の着いた計画として評価されるものである。また、検討を通じて学生さんと NPO 奥雲仙の自然を守る会との接点が構築されたことは、今後のお互いの諸活動において大きな価値をもたらすものであると考える。
- 今回のように地域を知った上で、何かを考え・提案することは重要なことであり、この経験を今後に活かすとともに、これらのプロジェクトが実現されることを期待して２日間の研修の総括とします。

**■岸田自然保護官**

- なかなか有意義な議論ができたと思っています。これからも、一緒に頑張りましょう。

**■関准教授**

- 現場に来て、現場の問題を考えることの大切さがわかってもらえたかと思う。
- Ａチームのプログラムの企画について、Ｂチームは、環境教育の意味づけ等の難しい問題にも踏み込み、Ｃチームは、仕掛けづくりを考えていたということで、３つのチームの提案が合わさることで田代原の保全につながるものになると思う。
- 環境倫理の立場化の提案として、あえてここ田代原の価値について否定的な意見、自己批判的な意見を出して考えてみることは、学生の特権として自由な発想で取り組んでみると、本当の価値が見えてくるのではないだろうか。疑うことで、事実が明らかになるということも合わせて考えてほしい。いろいろな問いかけの仕方を勉強していってほしい。

**■杉村教授**

- 実際に今回の議論をやってみて、楽しかったと思えることが大切である。総括的な議論の中で大変勉強になったと思う。

## 2－5. 研修生からの一言（研修終了後の感想等）

研修終了後に、２名の研修参加の方々に、参加しての感想等をいただきました。（研修報告書の様式は、田中氏作成の様式を使わせていただきました）

| 研修報告書 | | |
|---|---|---|
| | 報告日 | 平成 27 年 12 月 24 日 |
| | 所属 | 国際航業株式会社 |
| | 氏名 | 田中　雄一 |

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 概要 | 実施日時 | 平成 27 年 11 月 14 日（土）－15 日（日） | 場所 | 長崎県雲仙市田代原高原 |
| | テーマ | 第 3 回（若手技術者向け）フィールド参加型「地域課題発見・解決力」養成研修会<br>（共通テーマ）雲仙、田代原高原の価値、魅力とはなにか？<br>（共通テーマ）雲仙、田代原高原の問題点、課題はなにか？<br>（個別テーマ C）雲仙、田代原高原の価値を広く知ってもらうための広報のあり方について考える。また、広報の具体的なイメージについて考える。 | | |
| | 主催 | （一社）建設コンサルタンツ協会 | | |
| | 受講目的 | NPO、地元の人々、長崎大学、環境省職員とともに、雲仙・島原国立公園内の田代原高原の抱える課題を理解し、その解決方法をワークショップ（討論形式　:PCM）により探る。 | | |

| | | |
|---|---|---|
| 内容 | 要旨 | 1. 雲仙、田代原高原の価値、魅力<br>ミヤマキリシマやヤマボウシが群生し、秋は紅葉の景色が広がる。また、千々和断層等の地質的に価値の高い地形や、殿様道路等の遺跡がある。<br>2.雲仙、田代原高原の問題点、課題<br>雲仙、田代原高原を広く知ってもらい、訪れる人を増やしたいが、現状は知名度が低く、訪れる人が少ない。また、地元住民の無関心さや交通の便の悪さ等の問題を抱える。<br>3.解決方法を導くためのワークショップ（PCM 手法）の実践<br>現地の人々や長崎大学環境化学科の学生と現地の自然をめぐり、ワークショップを実施する。立場の違う、色々な人が協力して考え、地域の課題を発見し、現地の状況を踏まえた現実的な解決方法を提案する。 |
| | 所感 | 日ごろの業務とは異なる手法を用いて、現地の人々と一緒に行動、考えることで、現地の現状理解、課題、難しさをいつもより深く理解できました。また、立場の違う色々な人が協力して考えることで、たくさんの有効な意見があがる一方で、有効な意見をたくさんあげるためには、ファシリテーターが上手にリードをしないといけないとも感じました。初めてのファシリテーターということもあり、研修ではなかなかうまくいかず、上手にリードが出来るようになるためには、さらに経験を積む必要があると感じました。<br>今後、ワークショップによって地元住民と話し合い、問題解決を図る機会も増えてくると思いますので、今回の研修は貴重な経験でした。 |

| 研修報告書 | | |
|---|---|---|
| | 報告日 | 平成 28 年 1 月 12 日 |
| | 所属 | 扇精光コンサルタンツ株式会社 |
| | 氏名 | 山口　昌紘 |

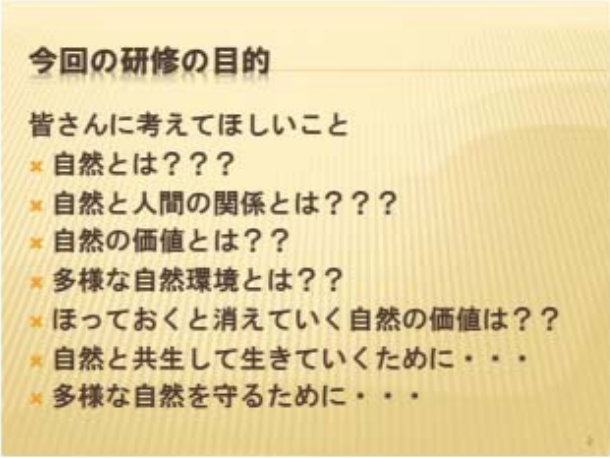
| | | |
|---|---|---|
| 内容 | 所感 | 今回の研修を通して、①多様な価値観に触れることの重要性と②その多様な価値観の下で個々の意見を総合することの難しさ・面白さを学びました。<br>①小学校から社会人になるまで多くの集団に所属しますが、当然ながら徐々に同じような思考と価値観を持った人が増えてきます。何かを一緒にするときは暗黙の了解が存在するので合意形成がしやすく、居心地が良い。その一方で、新しい刺激は少なくなるように感じます。今回は地元の方や学生などバックグラウンドが異なる集団が参加して、1つのテーブルで議論をしました。暗黙の了解が存在しないため、互いに意見がかみ合いにくい。だからこそ、みんなで知恵熱が出るくらい頭を捻りました。この経験は自分の思考レベルの幅を広げるような感覚が得られました。素晴らしい体験でした。<br>②「みんな違ってみんないい」とは言いますが、実際にプロジェクトの中で、価値観が異なる人が議論し、合意形成するのは、非常に難しい事だと感じました。ファシリテーターとして今回はその役目を十分に果たす事は出来ませんでした。しかし、面白かった。混乱の中にある議論が一歩進むときの達成感はこのようなワークショップでしか得られないことであったと考えています。 |

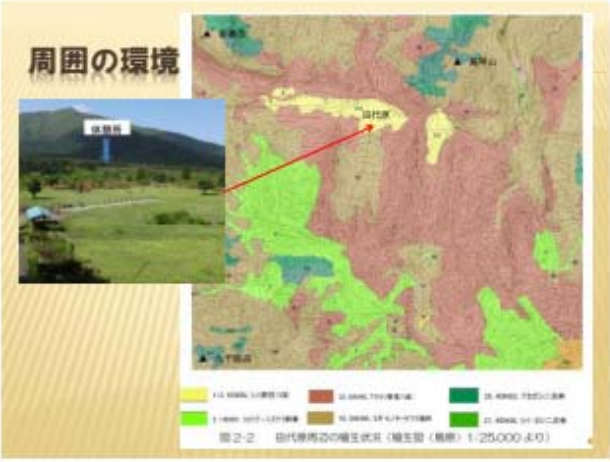
## 2－6. 集合写真

初日、天候の悪い中での集合写真【田代原高原の牧場入口において】

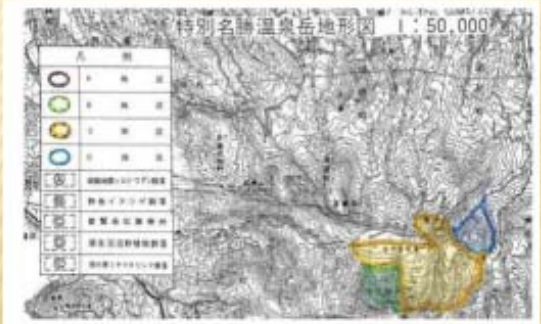
二日目、季節外れで開花したミヤマキリシマの前で

## 参考資料①：田代原高原の概要





## 特別名勝地にも指定されている田代原高原




## 2. 田代原高原が抱える課題

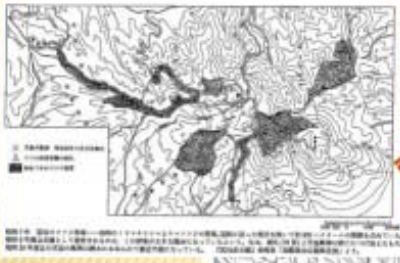
- 雲仙には、仁田峠に加え、田代原にも**ミヤマキリシマ**が生息
- 田代原の**ミヤマキリシマ**は、牧野環境に適合し生息していた
- 近年、牧野の牛の数が激減し、草地環境が、しだいにアカマツ林の侵入が顕著になってきた
- これにより、**ミヤマキリシマ**の生息環境が失われつつある
- 人力で、樹林化する環境を草地環境に維持しようとするも限界
- ちなみに、雲仙自然公園区域の田代原地区は「**ミヤマキリシマ**の生息する草地環境を維持する」の方針がある(環境省)

## 牧草地とミヤマキリシマ

牛、馬の放牧数の減少が、牧草地の減少、そして、ミヤマキリシマ生息域の減少を招いている

| 西暦 | 和暦 | 放牧草原の面積 | | ミヤマキリシマ群落の面積 | |
|---|---|---|---|---|---|
| | | 千々石エリア | 小浜エリア | 千々石エリア | 小浜エリア |
| 1823年 | 文政6年 | 約800ha | 約4500ha | － | － |
| 1893年 | 明治26年 | 約652ha | 約479ha | － | － |
| 1933年 | 昭和7年 | 約732ha | 約187ha | 約880ha（半島全体） | |
| 1980年 | 昭和55年 | （約60ha） | 0ha | 約33ha | 約8ha |
| 2014年 | 平成26年 | 約50ha | 0ha | 減少中 | 約8ha |

※「日本の自然公園」に倣い、1町歩＝1haにて換算。
※1933年以降の千々石エリアには、国有牧場も含む。
※2014年から下田代地区（約10ha）の放牧をやめた。



昭和7年

昭和55年

妙見岳周辺のミヤマキリシマ生息地の変化

2004⇒2013

10年間の変化

田代原高原の変化

## 田代原高原　ミヤマキリシマ第1生息地の状況

## 植物遷移とは・・・・・・・・

## 国（環境省）の田代原高原保全方針

| 保全対象（地種区分） | 概要 | 保全方針 |
|---|---|---|
| 田代原（第２種特別地域） | 田代原は千々石断層により形成された盆地であり、九千部岳や吾妻岳を間近に望むことができる。<br>長年の牛馬放牧の慣習と影響のもとでシバ草原（シバ－ゲンノショウコ群集）が広がっており、その中にミヤマキリシマが点在する。<br>トレイルセンターや野営場施設等環境に配慮された施設が整備されている。 | 田代原の景観要素の一つとなっている牧場風景や、放牧によりミヤマキリシマが点在するシバ草原の維持に努める。<br>環境学習にふさわしい場となるよう保全に努める。 |

## 3.人手を掛けてでも守らなければいけない自然とは・・・・

- 平成17年に、「NPO雲仙の自然を守る会」によるミヤマキリシマ保全活動が始まる。なぜ、人手を掛けてでも守ろうとするのか？？
- 地域のシンボルだから
- 昔の思い出の場所を残したい（遠足で来ていた場所　等・・・・）
- 雲仙国立公園が国立公園に指定された魅力の一つだから
- 国立公園のもつ「保全」「利用」が活かされるために必要だから
- 森になってしまえば、失われた環境は戻ってこないから
- 多様な環境が、単調な環境になってしまうから
- その他・・・・・・・・・・・・・・・・・

写真　長崎大学学生も参加したミヤマキリシマ保全活動の集合写真

## ミヤマキリシマ保全活動の効果

## 4.取り組んでいる課題

### 4-1. 牧野としての田代原の復活

- 当地域は、自然公園区域第2種特別区域であるとともに、牛の放牧地として牧野組合の管理地となっている。これらの制約を受けるとともに、牧野（牧草地）としての環境を維持することが必要である。
- ミヤマキリシマ保全を目的とした下草刈り等の管理を行うべく、NPO等が活動を行ってきたが、一般的な自然公園区域内の制約等、十分なミヤマキリシマ保全の管理ができていない状況になっている。
- 日本初のジオパークに指定された場所でもあり、断層角盆地としての地層を形成している場所でもあり、教育的なフィールドとしての価値を有するとともに、パワースポットとしても注目される資源を有している。
- 地質的な特性以外にも、歴史的な資源（殿様街道等）や、教育文化財も豊かで、様々な学習が可能な場所となっている。また、固有で良好な自然環境は、癒しの場として、また、自然体験の場として、より身近で利用価値の高い地域として再生していくことを可能としている。

## 4-2.「遊々の森」を環境教育フィールドへ

- 平成２２年に、田代原地区を「遊々の森」として指定
- 長崎県初の森林環境教育の場として、長崎森林管理署、雲仙市、島原雲仙農業協同組合と、守る会の４者間で、「奥雲仙牧場の森」の協定を締結
- 今後、小中学生等を対象とした環境フィールドにすることを模索中

- 現在までは、牛の放牧の関係で、幼稚園の卒園記念で巣箱掛け（森林管理署協力で紙芝居等も実施）を４年間実施しています。
- 今後は牛の放牧がなくなりましたので、本来の遊々の森の目的にあった活動を実施していく予定にしています。
- 対象は小学校や学童施設、小学生を持つ家族、緑の少年団などを中心に、ニーズに合えば企業などの各種団体の研修や憩いの場としての利用を考えています。

## 4-3.地域特産品開発のメニュー開発

現在の特産品としては、次のものがあげられるが、今後は、新たな特産品開発を行う。

- ゆず加工品（ゆずこしょう、ゆずジャム、ゆずシャーベット　等）
- 松葉の健康飲料
- 田舎饅頭
- 草木染
- 花炭
- 田舎料理
- 念珠　等

## 4-4.エコツーリズムのメニューづくり

- 雲仙温泉、小浜温泉との連携によるメニューづくり
- スローフード、健康志向を基軸としたメニューづくり
- ジオパーク雲仙としての地質・地層の特徴を生かしたメニューづくり

## （再掲）皆さんとともに考えたいこと

- 自然とは？？？
- 自然と人間の関係とは？？？
- 自然の価値とは？？
- 自然公園の価値とは？？
- 多様な自然環境とは？？
- ほっておくと消えていく自然の価値は？？
- 自然と共生して生きていくために・・・
- 多様な自然を守るために・・・

## （MEMO）

## 参考資料②：田代原高原に残る草地・環境を維持する方策（案）

| 区　分 | 範　囲 | テーマ |
|---|---|---|
| 土台づくり<br>（固める活動） | 島原半島全体<br>（広範囲） | 雲仙天草国立公園の利活用への理解<br>国立公園は守るだけでなく、利用されることも目的としていることを管理者や利用者等の共通認識とする |
| | | 雲仙岳の景観的魅力の再発見<br>四方を海に囲まれ、遠方からも眺められる雲仙岳。その姿は、見る位置を変えることで大きく変化する魅力を知ってもらう |
| | | 島原半島の連携促進<br>これまで歴史的経緯もあり、バラバラであった島原半島。それぞれの地域でいろいろな魅力の宝庫である島原半島が、一体的に連携を持った戦略を立てられる組織づくりが必要 |
| | 田代原 | 国立公園における田代原の価値の理解<br>雲仙国立公園の特徴の一つであった草原性の環境が残る唯一の地区であること。また、草原性の環境で咲くミヤマキリシマの生息地であることへの理解 |
| | | 放置された自然の遷移で失われつつある環境への危機感<br>草原性の環境が、放牧数の激減で失われつつある危機感を共通の認識として持つ |
| | | 田代原の知名度の向上<br>上記の情報を発信することで、ほとんど知られていない奥雲仙田代原への知名度をあげる |
| | | 利用者ニーズへの対応<br>景観、地形、植物等の田代原ではの魅力をベースに、観光利用者の最近のニーズに見合った活動メニューを提供する |
| | | 交通の利便性を高める工夫<br>田代原への誘導ツールを充実することや、神代からの不定期バス等の設置、駐車場の整備等を行う |
| 攻めの活動 | 島原半島全体<br>（広域） | 島原半島全体の魅力を生かしたイベント等の開催<br>雲仙岳を海から眺める島原観光クルーズ、島原一周駅伝、島原一周トライアスロン等のイベントや観光企画を立てる。「島原ぐるりんネット」等の組織を設立する等 |
| | 田代原―神代 | 「北目ロード」を軸とした観光ネットワーク構築<br>神代-岩戸-田代原を結ぶ軸を中心とした観光資源を結んだ「北目ロード」ネットワークを構築する（共助研提案） |
| | 田代原 | ソーシャルビジネスの立ち上げ<br>牧畜産業の再生、あるいは、新たな放牧事業（観光牧場）を行うことを目的としたソーシャルビジネスを立ち上げる |
| | | 「遊々の森」における森林教育フィールドづくり<br>森林教育の有用性をより多く知ってもらうため、田代原（下）のフィールドを活用した森林教育イベントを開催する |

## 参考資料③:PCM 手法の概要

### PCM による討議について

#### 1)PCM 手法による討議とは

●PCM 手法を基本に

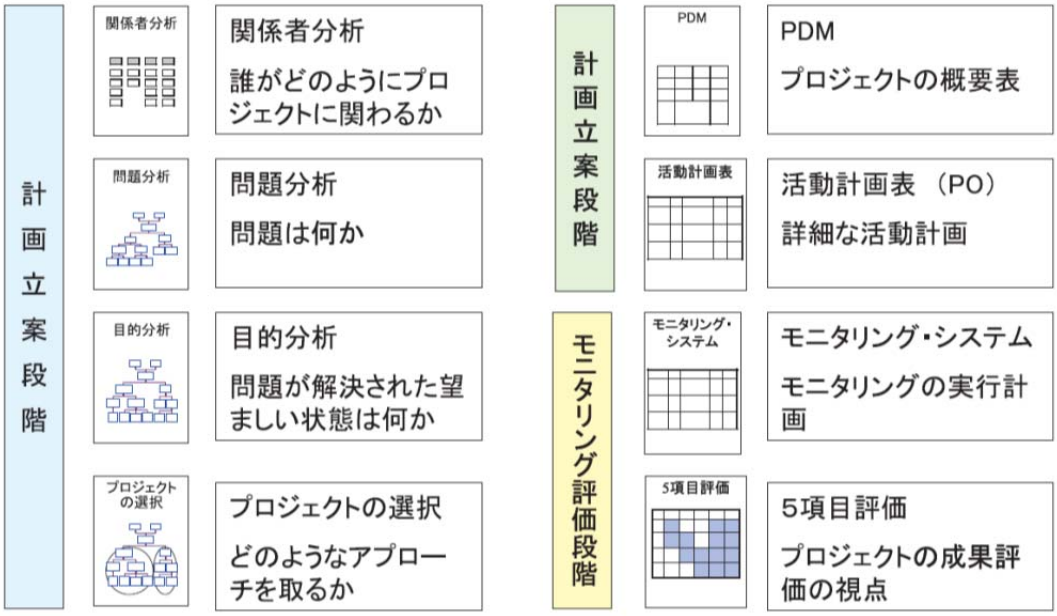
今回の研修は、ＰＣＭ（プロジェクト・サイクル・マネジメント）手法をなぞったワークショップ形式で行います。

ＰＣＭ手法は、ＦＡＳＩＤ（国際開発機構）が、国際的な開発援助プロジェクトの立案・運営・管理能力を有する人材を養成するために採用している手法です。

PCM 手法では、開発援助プロジェクトの計画・実施・評価という一連のサイクルを「プロジェクト・デザイン・マトリックス（PDM)」と呼ばれるプロジェクト概要表を用いて管理運営します。

（下図参照。PCM の詳細は別資料に。）

図 A3－1　PCM 手法の全体構成




（FASID「PCM 手法の理論と活用」より）

#### 2)グループ討議

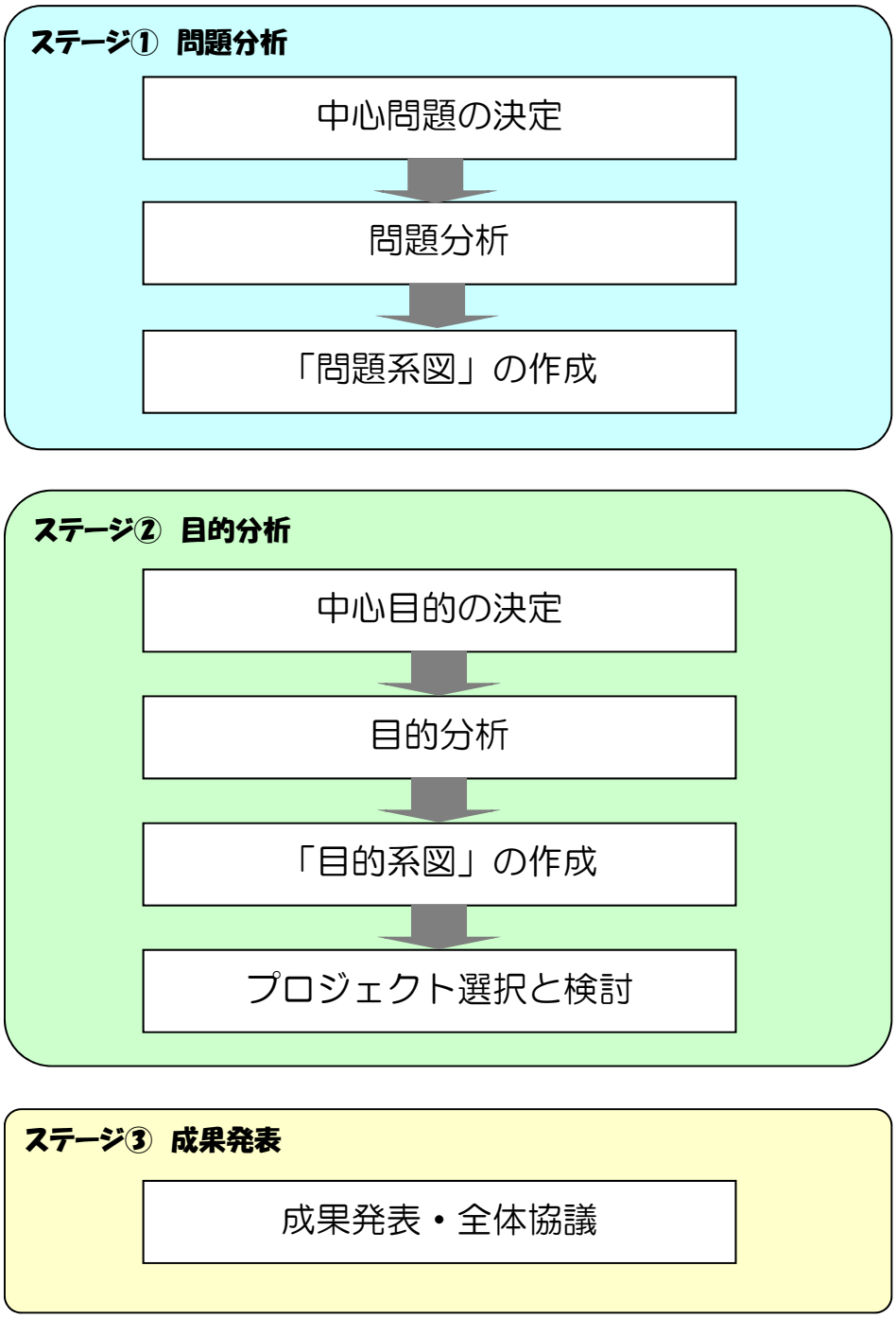
●チーム編成（１チーム１０名）

- 学生（６名）　　初日、二日目に発表する発表者をあらかじめ決めておく
- 研修生（1－２名）　　初日、二日目に発表する発表者をあらかじめ決めておく
- NPO、地元住民（１～２名）
- 共助研メンバー（３名）＋研修生（1-2 名）：グループワーク進行

研修生は、共助研スタッフのアシスタントとして、ファシリテートの役を担う

●グループワークの手順

グループワークでは、この PCM 手法に沿って以下の手順で作業を行います。




●グループワークでの役割

グループワークは、チーム内の進行役のリードにより話し合いと意見整理で進めていきます。

若手技術者には、チームの進行役と記録係（意見をポストイットに書き出し、整理）を担当していただきます。参加者みなさんから意見を引き出し、奥雲仙地区の問題の洗い出し及び必要なプロジェクトの提案を行ってください。

PCM の経験があり、奥雲仙地区のことを知っている共助研メンバーが進行します。

### 3)ステージ①問題分析

**●問題分析の方法**

1.チームテーマについて「気になること」を発表する。

⇒メンバー全員が、ポストイットに 1～2 項目書き出し、発表する。

⇒地元住民は、日頃から感じていること。

⇒若手参加者・共助研メンバーは、外から見て感じたこと。

2.「中心問題」を決めて、白紙の真ん中に貼る。（赤のポストイット）

⇒全員が発表したら、項目の種類や共通点等を話し合い、「中心問題」を決める。

⇒「中心問題」を赤のポストイットに書き出し、白紙の真ん中に貼る。

3.「中心問題」が起きている「原因」を話し合う。（「中心問題」の下半分に配置）

⇒若手は、一人が進行役、一人がメンバーの意見をポストイットに書き込み、白紙に貼る。

⇒進行役は、「中心問題」を引き起こしている「原因」を、メンバーから聞き出す。

⇒意見はどんなささいな意見であっても拾い上げ、ポストイットに簡潔に書きとめる。

⇒出された意見については、類似意見は寄せて配置し、また意見間の関係も整理して、中心問題の下半分に配置する。

4.「中心問題」から引き起こされている「結果」を話し合う。（「中心問題」の上半分に配置）

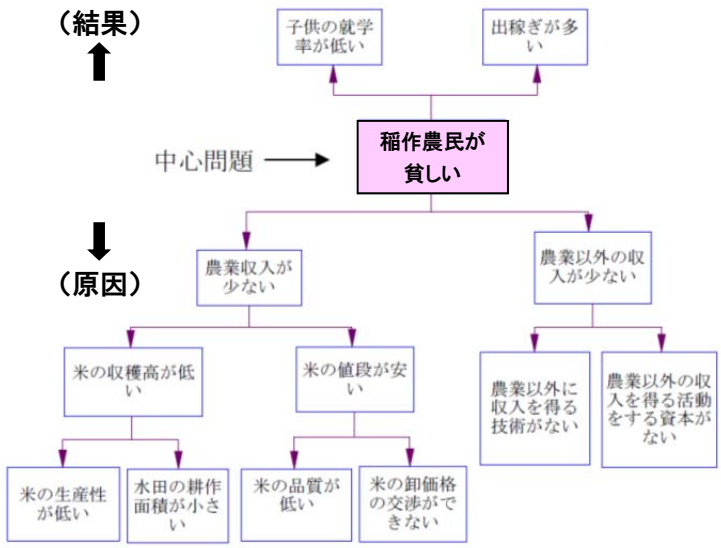
⇒「原因」と同様に「結果」について意見を聞き、ポストイットに簡潔に書きとめて、中心問題の上半分に配置する。

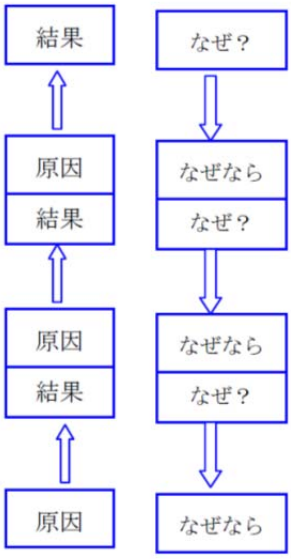
5.「問題系図」を完成させる。

⇒問題の原因、結果について十分に話し合う。

⇒「原因」と「結果」相互の関連性、詳しい内容、不足が無いか等を確認して「問題系図」を完成させる。

問題分析の例



### 4)ステージ②目的分析

**●目的分析の方法**

1.前日の「問題系図」を確認する。

⇒進行役が「問題系図」の概要を読み上げて、前日の話し合った内容を確認する。

⇒内容の追加や修正などについて、意見を聞く。

2.「中心目的」を決める。（緑のポストイット）

⇒問題系図の中心テーマや最も関心の高かった問題を選び、肯定の表現で目的系図の「中心目的」とする。（必ずしも中心問題の裏返しでなくても良い。）

例えば、「交通事故が頻繁に起こる」→「交通事故が大きく減少する」

⇒「中心目的」を緑のポストイットに書き出し、白紙の真ん中に貼る。

3.「問題系図」の「原因」を参考にしながら、「中心目的」を解決する「手段」を話し合う。（「中心目的」の下半分に配置）

⇒「問題系図」を参考にしながら、中心目的の解決手段（原因の裏返し）についてメンバーから聞き出す。

⇒意見はどんなささいな意見であっても拾い上げ、ポストイットに簡潔に書きとめる。

⇒出された意見については、現実的かどうか、マイナスの影響が出ないかどうかを確認し、中心目的の下半分に配置する。

4.「中心目的」から導かれる「直接目的」を話し合う。（「中心目的」の上半分に配置）

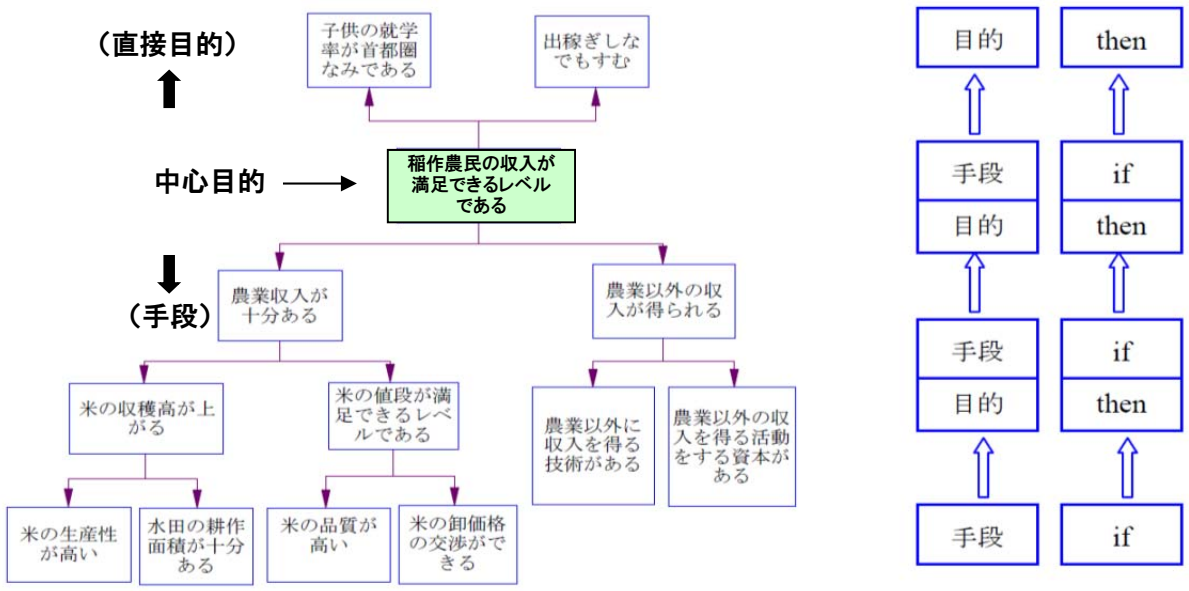
⇒「問題系図」を参考にしながら、中心目的から誘引される「直接目的」（結果の裏返し）について意見を聞き、ポストイットに簡潔に書きとめて、中心目的の上半分に配置する。

5.「目的系図」を完成させる。

⇒「手段」と「直接目的」について十分に話し合う。

⇒特に、「手段」については具体的な手段がわかるレベルまで話し合い、「目的系図」を完成させる。

目的分析の例



### 5)ステージ②の続き・プロジェクト選択

**●プロジェクト選択の方法**

1.「目的系図」から、プロジェクトを確認する。

⇒「目的系図」のなかで、プロジェクトの原型を構成している範囲を線で囲む。

⇒線で囲んだ範囲それぞれについて、それらが目指す目的と戦略を確認する。

⇒プロジェクトとして不適切なもの、実施が困難なものを確認し、対象から除外する。

2.重要なプロジェクトを１～2 選定し、その具体的な進め方を整理する。

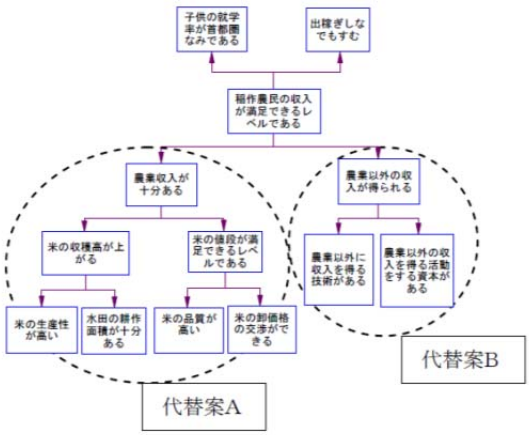
⇒選定したプロジェクトについて、以下の項目を話し合う。

- プロジェクトが対象とするモノ・人・コトは。
- 対象をどうしていくか。（目標と指標）
- 誰が主体となって行うか。
- 奥雲仙地区としての体制をどうするか。
- 規模・範囲は妥当か。
- 手順をどうするか。
- マイナスの影響はないか。
- 目標が達成されると、奥雲仙地区はどう変わるか。

⇒プロジェクトを、白紙にまとめる。（名前・目標・内容・体制等）

プロジェクトの選択の例

代替案を線で囲む




代替案を比較検討する

| | 代替案A | 代替案B |
|---|---|---|
| ﾀｰｹﾞｯﾄ･ｸﾞﾙｰﾌﾟ | 稲作農民 2700 人 | 稲作農民の一部 約 1500 人 |
| 受益者のﾆｰｽﾞ | 非常に高い | 高い |
| 政策的優先度 | 非常に高い | 高い |
| 必要な資源 | 稲の新品種普及員<br>灌漑施設 | 資本金<br>小規模事業指導員 |
| 費用 | 大きい | 中くらい |
| 費用便益比 | 大きい | 中くらい |
| 技術的難易度 | 中くらい | 中くらい |
| 達成可能性 | 高い | 中くらい |
| リスク | 中くらい | 中くらい |

### 6)ステージ③・成果発表

●発表者：学生代表

●発表時間：10 分

●発表スタイル：自由。「問題系図」や「目的系図」、プロジェクトまとめ等を使って。

●質問等：他のチームから質問・意見を受ける。５分程度

## 関連資料①：プレス資料

記事掲載のお願い（プレスお知らせ）

平成27年11月9日

報道関係者各位

（一社）建設コンサルタンツ協会九州支部
九州郷づくり共助ネットワーク研究会　会長　針貝武紀

### 第3回「地域課題発見・解決力」養成研修会開催のご案内

～自律した建設コンサルタントを目指して（若手技術者向けフィールド参加型研修会）～

今、私達建設コンサルタントは、変化していく社会ニーズに対して、それぞれの専門技術を核としながら、自律した建設コンサルタントとして積極的に対応していくことが強く求められています。例えば、私達自身が地域に入ってその実態を体感し、その解決策を探りだしていくと言った、「地域課題発見・解決力」とも呼ぶべき総合的な技術力も身に付けることが重要になっています。

建設コンサルタンツ協会九州支部は、夢アイデア部会活動の一環として様々な地域の地域づくりを支援してきました。

今年で第3回となる本研修会は、昨年に引き続き、長崎県雲仙市田代原高原にて、国立公園区域内における自然保全のありかたや、ミヤマキリシマ保全のありかた等を背景に、地域おこしを探るため、現地の自然を巡り、現地の声を聞き、現地の人々とひざを交えながら、「地域課題発見・解決力」養成のための研修会を開催するものです。

長崎大学環境科学科の学生さんも参加した「田代原環境保全」の勉強会

なお、今回は、**長崎大学水産・環境総合科学科の学生さんたちのフィールド研修との合同での研修会**となりました。学生さん、地元の方々と一緒に、地域の問題解決への活発な意見・アイデア等を出し合い、有意義な成果を期待しています。

**このイベント開催の当日取材を、ぜひともお願い申し上げます。**

記

〇日時：平成27年11月14日（土）10：30～　　15日（日）14：30
〇場所：長崎県雲仙市田代原高原（NPO奥雲仙の自然を守る会研修室、トレイルセンター）
〇プログラム：別紙参照
〇主催：（一社）建設コンサルタンツ協会夢アイデア部会・九州郷づくり共助ﾈｯﾄﾜｰｸ研究会

【問い合わせ先】
〒812－0013　福岡市博多区博多駅東１丁目１３－９　　TEL：092－434－4340
（一社）建設コンサルタンツ協会夢アイデア部会・九州郷づくり共助ﾈｯﾄﾜｰｸ研究会
E-mail:qsinfo@jcca.or.jp　　事務局：波木、松尾

田代原高原のミヤマキリシマ　⇒

（別紙）

# JCCA 若手技術者研修会（第３回地域課題発見・解決力養成研修会）予定表

日時：平成 27 年 11 月 14 日（土）－15 日（日）
場所：長崎県雲仙市田代原高原
同時開催：長崎大学環境科学科　奥雲仙田代原フィールド研修
協力：NPO 法人奥雲仙の自然を守る会、環境省雲仙自然保護官事務所

## 1．研修の目的

NPO、地元の人々、長崎大学、環境省職員とともに、雲仙・島原国立公園内の田代原高原の抱える課題を理解し、その解決方法をワークショップ（討論形式：PCM）により探る。

- （共通テーマ）雲仙、田代原高原の価値、魅力とはなにか？
- （共通テーマ）雲仙、田代原高原の問題点、課題はなにか？
- （個別テーマ A）雲仙、田代原高原を知ってもらうためのイベントとしてどのようなことをすればいいか。また、その企画について考える。
- （個別テーマ B）雲仙、田代原高原を訪れる人を増やすため、地域はどのような受け皿を用意すればいいか。また、その受け皿の具体的イメージについて考える。
- （個別テーマ C）雲仙、田代原高原の価値を広く知ってもらうための広報のあり方について考える。また、広報の具体的なイメージについて考える。

## 2．スケジュール

11 月 14 日（土）

| | |
|---|---|
| 7：30 | JCCA 前集合（別途行動については、6．移動手段等参照） |
| 8：10ごろ | （基山 SA にて、波多野氏と合流） |
| 10：10（島原鉄道「神代駅」 | 長大学生集合、集合後　「遊学の里」送迎バスにて移動） |
| 10：30 | 全体集合（NPO 奥雲仙の自然を守る会　研修室） |
| 10：40-12：00 | 現地の状況説明（NPO、環境省） |
| 12：00-13：00 | 昼食　（地元食材弁当 500 円/人） |
| 13：00-14：50 | ミヤマキリシマ保全活動（上田代原にて草刈り等）　雨天の場合は座学 |
| 14：50-15：00 | 研修会場へ移動（学生＋引率者は徒歩で。共助研、NPO は車で） |
| 15：00-17：30 | グループ討議（3グループ）：場所：田代原トレイルセンター |
| 17：30-18：00 | 宿泊先「遊学の館」へ移動 |
| 18：00-19：30 | 夕食、懇親会（環境教育、環境保全に関する各自の体験談披露　等） |

11 月 15 日（日）

| | |
|---|---|
| 8：30- 9：00 | 移動 |
| 9：00-11：30 | グループ討議：トレイルセンター |
| 11：30-12：00 | 移動 |
| 12：00-13：00 | 昼食（地元食材弁当 500 円/人） |
| 13：00-14：00 | 報告会、総評 |
| 14：00-15：30 | （岩戸神社、神代小路等の見学） |
| 15：30 | 帰途 |
| 17：30 | JCCA 事務局前着 |

研修会会場
NPO 奥雲仙の自然を守る会　研修室　14 日　10：30－13：00
　その後、田代原高原にて草刈り活動、トレイルセンターへ移動

**NPO 法人　奥雲仙の自然を守る会**

**長崎県雲仙市国見町土黒庚2323番地**
**TEL　0957-78-3521**

## 関連資料②:事務局資料

### １．集合場所、会場

●集合場所（14日（土）７：30）

建設コンサルタンツ協会　九州支部（博多駅東１１３ビル）玄関

福岡市博多区博多駅東１丁目 13-9

●研修会会場

NPO 法人　奥雲仙の自然を守る会　研修室

●準備するもの

- １日目の「ミヤマキリシマ保全活動」では、除草・伐採作業を地元の方々、長崎大の学生さんと行います。軽作業ができる服装・靴でお願いします。
- 作業道具等については、現地にて準備します。
- 現地では、ドコモ以外の携帯電話はつながりにくいため、連絡等のやりとりをする必要がある場合は、ドコモの携帯電話を持参ください。
- 宿泊場所「旅館松栄」には、歯ブラシ等がありませんので、洗面道具（歯ブラシ、歯磨き粉、タオル等）は持参ください。

## ２．食事・宿泊　の費用

宿泊・食事：遊学の里くにみ（遊学の館）

14 日の宿泊費：3,000 円、朝食：700 円、夕食：1,800 円　小計 5,500 円

昼食（２食）：NPO 奥雲仙の自然を守る会から提供

14 日及び 15 日の昼食費：１食５００円、２日分　小計 1,000 円

計 6,500 円

●車利用の場合：長崎駅から80分・諫早ICから50分・島原から30分・長崎空港から80分
●バス利用の場合：神代バス停下車・2km
●電車利用の場合：島原鉄道神代町駅下車・2km

## ３．準備するもの

１）事前の対応

レンタカーの確保：済（８人乗り２台、前日に借り入れ（山下、前田））

２）当日

資料　（20 部程度（予備を含め））

奥雲仙田代原高原ミヤマキリシマ保全のための活動報告書（H27.10.28）共助研

＊長崎大学関係者には配布済

NPO　奥雲仙の自然を守る会　活動主旨

環境省　雲仙天草国立公園　パンフレット等

共助研の活動紹介資料

ＣＰＤ証明書

説明用のＰＰ（ＵＳＢ）　パソコン等はＮＰＯで準備

WS　備品（前回の残り使用、模造紙は追加購入（矢ヶ部担当））

模造紙（A1 版　２０枚）、ペン（黒・赤　各５０本）、付箋（適宜）

記録機材　　カメラ（各自）、ビデオカメラ（矢ヶ部）、ボイスレコーダー（班リーダー）

## 4．移動手段、注意事項、役割分担　等

１）移動手段

JCCA 事務局前からの出発　８名

- 共助研（濱田、山下、木寺、森脇、前田、矢ヶ部）
- 研修生（林（長大）、田中（国際航業））

基山 SA で合流　１名

- 共助研（波多野）

神代駅で合流　１名

- 共助研（鶴田）　＊状況によっては長崎大学と一緒のバスに乗車

長崎大学（杉村教授、関准教授、学生 17 名）：別途バスで移動

現地（奥雲仙田代原）集合　自家用車等利用　４名

- 共助研（波木、松尾、木寺）
- 研修生（山口（扇精光：長崎会員会社））

２）注意事項

- 服装、靴は、現場作業が可能なもので
- 歯ブラシ、タオル等のアメニティは持参

３）役割分担

総括（全体統括：波木事務局長、統括：松尾リーダー）

進行（矢ヶ部）、会計（矢ヶ部）、記録（カメラ：前田）

討議指導（A 班：松尾、濱田、鶴田、B 班：森脇、山下、木寺、C 班：前田、矢ヶ部）

”　秋深み　色あせてなお　春想ふ　君が心を　たれぞ知るらむ　”

詠み人：針貝武紀

晩秋の田代原に咲くツツジを見て


**第３回「地域課題発見・解決力」養成研修会　報告書**

編集日　平成 28 年 1 月

編集者　**九州 郷づくり共助ネットワーク研究会**（（一社）建設コンサルタンツ協会九州支部内）

報告書とりまとめ責任者：松尾敏彦、矢ヶ部輝明

〒812-0013　福岡市博多区博多駅東 1-13-9　博多駅東 113 ビル　8 階

TEL 092-434-4340　　FAX 092-434-4342

共助研 HP：http://www.jcca.or.jp/kyokai/kyushu/q-sato/